

日タイ母語場面における謝罪行動の研究  
—謝罪する側の謝罪行動の機能とその出現位置に着目して—

ルンタンヤニティトーン チャナントーン\*

A Study of Apology behavior in Japanese and Thai native situation:  
Focusing on apologizer's apology behavior function and its appearance position

RUNGTANYANITITORN Chanantorn

Abstract

This study aims to examine the characteristics of apologizer's speech function and appearance position by comparing Japanese and Thai native speakers. The result of analyzing role-play conversation data was that there are similarities and differences between these two languages while making apologies. Both Japanese and Thai native speakers tend to use "giving resolutions" and "explaining reasons" at opening and main section in order to recover the relationship with their interlocutors. Nevertheless, Japanese native speakers use "expression of apology" at every appearance position and "show consideration" at main section more frequently than Thai native speakers. From the result, it can be implied that when an unsatisfactory situation occurs, both Japanese and Thai native speakers are actively trying to recover the relationship with their interlocutors. However, Japanese native speakers are likely to show explicit responsibility, while Thai native speakers focus on problem-solving more.

Keywords : apology behavior, role-play, appearance position, Japanese native speakers, Thai native speakers

1. はじめに

謝罪は謝罪する側が相手への被害などの責任を認め、許しを乞い、それによって相手との人間関係における均衡を回復する行為であるとされている(熊谷, 1993: 4)。謝罪場面における人間関係の修復は、謝罪する側が謝罪表明を行うのみならず、代案の提示などの様々な方策を行わなければならないため、複雑な過程であると言える。また、池田(1993)によると、人間関係の修復方法が文化によって異なるため、異文化コミュニケーションにおいて母語の謝罪行動をそのまま持ち込むと、相手との間に誤解が生じる可能性があると言われている。特に、近年交流がますます盛んになる日本とタイは、両者が直接接する機会が徐々に増えてきており、接触の中で好ましくない状況が起こることが予想される。ウィッターヤンヤーン(2008)は謝罪行動を行う際に、日本語母語話者は相手に言い訳と思われないように理由をほとんど説明しないが、タイ語母語話者は相手に理解してもらうために、理由を説明するというように行動にずれがあり、それが両者の誤解をもたらす原因であると指摘している。日本語接触場面においてこのようなミスコミュニケーションを避けるためには、両言語の謝罪行動の使用実態を明らかにする必要がある。そこで、本研究では日本語母語話者(以下、JNS)とタイ語母語話者(以下、TNS)の謝罪する側の謝罪行動に着目し、それぞれの特徴を明らかにすることを目的とする。

---

キーワード：謝罪行動、ロールプレイ、出現位置、日本語母語話者、タイ語母語話者

\*平成30年度生 比較社会文化学専攻

## 2. 先行研究

### 2.1 謝罪行動の定義

本研究では熊谷（1993：4）に従い、謝罪行動を「謝罪する側が相手への被害などの責任を認め、許しを乞い、それによって相手との人間関係における均衡を回復する行為」と定義する。

### 2.2 日タイ母語場面における謝罪の先行研究

これまでの日タイ母語場面における謝罪行動の対照研究には、Fuangkajonsak（2005）、ウィットヤーパンヤーノン（2008）などがある。2つの研究はポライトネスの観点<sup>1</sup>から謝罪行動の特徴を分析している。Fuangkajonsak（2005）はドラマの台詞と談話完成テスト（DCT）を用い、謝罪行動の機能を分析した。その結果、JNSの特徴は「人間関係重視型」であるため、「謝罪表明」や「責任承認」を多用する傾向がある。一方、TNSの特徴は「問題解決重視型」であるため、「相手を満足させること」や「事情説明」を頻繁に使用するという違いが明らかになった。次に、ウィットヤーパンヤーノン（2008）はJNSとタイ人日本語学習者によるインタビューデータとドラマの台詞を用い、謝罪行動の機能を分析した。その結果、JNSは相手の気持ちを優先し、自分のフェイス<sup>2</sup>を損なう「謝罪表明」や「責任承認」を行うのに対して、TNSは自分と相手の気持ちを同時に重視し、双方のフェイスを保つ「事情説明」や「弁償の申し出」を併用することが分かった。

以上の先行研究では、DCTやインタビューのデータを用い、ポライトネスの観点から日タイの謝罪行動の機能の特徴が明らかにされた。しかし、DCTやドラマの台詞、インタビューのような調査方法は、謝罪する側の一回の回答を抽出し、分析をしているため、実際の会話のやり取りが反映されているとはいえない。また、宇佐美（2001：24）はポライトネス理論の一つの問題点として「一発話行為レベル、多くて幾つかの発話行為の連鎖レベルの分析に留まり、より長い談話におけるポライトネスをうまく説明できない」と指摘している。このように、ポライトネス理論で謝罪する側の発話文のみを分析することは、謝罪談話の全体的な構造を捉える上で不十分であると考えられる。そのため、本研究では自然会話に近いロールプレイ会話を用いることにする。その理由は、会話の開始から人間関係の修復に至るまでどのような謝罪行動の機能が使用されるか、その機能がどの位置で出現するかという談話レベルの観点で分析できるからである。また、上記の先行研究では謝罪行動の出現位置の特徴がまだ明らかにされていない。ハリスティアニー（2014）によると、同じ謝罪行動が使用された場合でも出現位置が異なれば、謝罪される側の反応や会話全体の流れも変化するとされる。そのため、両母語話者間のミスコミュニケーションを防ぐために、出現位置の特徴を分析する必要がある。したがって、本研究では日タイ母語場面における謝罪行動の特徴を詳細に把握するために、ロールプレイ会話を用い機能と出現位置に着目し分析を行う。

## 3. 研究課題

研究課題（以下、RQ）は以下のように設定する。

RQ1 JNSとTNSの謝罪行動の機能においてどのような使用傾向が見られるか

RQ1.1 JNSとTNSはどのような謝罪行動の機能を多用するか

RQ1.2 JNSとTNSの謝罪行動の機能に使用頻度の差が見られるか

RQ2 JNSとTNSが多用した謝罪行動の機能においてどのような出現位置が見られるか

RQ2.1 JNSとTNSの間の出現位置に差が見られるか

#### 4. 研究方法

調査対象者は20代のJNS同士及びTNS同士の親しい友人関係の女子大学生、大学院生を各25組ずつとした（計50組）。対象者にはそれぞれの母語でロールプレイをしてもらい、ICレコーダーで録音した。その後、対象者の内省を得るために、フォローアップインタビューを実施した。データの収集期間は2017年5月から9月末までである。ロールプレイの内容はハリスティアニー（2014）を参考にし、金銭の返済における謝罪場面とする。その理由としては、金銭の返済場面は日常生活で起こり得ることであり、どの文化であっても重要な話題であるからである。そのため、会話参加者が積極的に交渉しなければ、人間関係が修復されがたいと考えられる。ロールカードの指示は次のように設定した。

A：お金を借りた人

先週あなたは友人のBさんに1,000円借りました。あなたは一週間後、お金を返すと約束をしました。今日はお金を返す日ですが、何らかの理由でBさんに1,000円返すことができません。そのことをBさんに話してください。

B：お金を貸した人

先週あなたは友人のAさんに1,000円貸しました。Aさんは一週間後、お金を返すと約束しました。今日はお金を返してもらう日です。しかし、Aさんは今日までにお金が返せないそうです。あなたはこの1,000円が必要です。（何に使うかはご自分で決めてください。）Aさんの話を聞いて、会話をしてください。

分析方法について、RQ1の分析枠組みは、ボイクマン・宇佐美（2005）、鄭（2011）、ハリスティアニー（2014）を参考にする。分析範囲は、謝罪する側が謝罪表現や問題に関する事情を説明してから、交渉が終了するまでとする。分析単位に関してはウォンサミン（2016）に従い、意味的なまとまりがある要素を一つの単位としている。一発話が複数の機能を含む場合、一つ以上の機能を分析し、それぞれの使用頻度を回数と割合で示した。また、両者の使用頻度の差を検証するためにt検定を行う。RQ2はJNSとTNSの多用した機能と使用頻度の差が見られた機能を取り上げ、出現位置を検討する。出現位置はハリスティアニー（2014）を参考に「先行部・中央部・終結部」という3つの談話レベルの出現位置に分けた。まず、先行部は謝罪する側の一回目の発話から謝罪される側の一回目の応答までとする。次に、中央部は謝罪する側の二回目の発話から謝罪される側が代案提示を受け入れる発話までとする。そして、終結部は謝罪される側が代案提示を受け入れた後の発話から、別れの挨拶までの発話とする。また、t検定によって、出現位置に差が見られた機能を検討する。

以下の表1と会話例1<sup>3</sup>に謝罪行動の機能の分析枠組みと、分析の仕方を示す。タイ語の発話例の（ ）は日本語訳である。

表 1 謝罪行動の機能の枠組み

機能	定義	JNSの発話例	TNSの発話例
A. 事情説明	原因や故意でなかったことを説明する。	今本当に金欠で	เป่าตั้งค์เราหายทั้งใบเลยอะ (財布をなくしちゃったよ)
B. 謝罪表明	慣用表現で謝罪を言う。	本当にごめんね	ขอโทษ (ごめん)
C. 責任承認	相手の期待に沿えないことに対して責任を認めたり、自虐したりする。	私のせいだから	ชั้นเป็นคนยืมแกไป (私が借りた人だから)
D. 代案提示	問題解決のために、解決法の提示や返還の申し出、約束に言及する。	明日絶対返すから待ってもらってもいい?	คืนวันหลังได้มัย? (お金は後で返してもいい?)
E. 情報要求	解決法を探るために、詳しい情報を尋ねる。	何時ぐらいまで待ってもらえる?	ต้องจ่ายค่าบัตรภายในเมื่อไหร่? (支払いの締め切りはいつ?)
F. 攻撃弱化	相手の怒りを推測し、その気持ちを静めるために、相手をなだめる。	該当なし	อย่าโกรธนะ (怒らないでね)
G. 相手への配慮	不愉快な状況に対して、相手の考えや意向を尋ねたり、状況について気を配ったりする。	A: そこまでしなくてもま何とかできる →B: でも今日まででしょ?大丈夫?	A: แกคืนเราวันหลังก็ได้ (返すのは後でいいよ) →B: แกโอเคมัยเนี่ย? (本当に大丈夫?)
H. 互いの親しさに言及	相手との親しい関係を述べる。	該当なし	ชั้นเพื่อนแกละ (私達は友達だよ)
I. 感謝表明	謝罪を受け入れた相手に感謝を述べる。	ありがとうね	ขอบคุณนะ (ありがとうね)
J. 冗談	不愉快な状況を緩和するために、冗談を言う。	A: Mちゃんから借りてきてhhh →B: hhhまた? それ借金ループだな	該当なし

- 会話例 1 TNS41: 謝罪する側、TNS42: 謝罪される側
- 1TNS42 ที่ยืมไป300อะ ขอคืนได้ปะ? ต้องใช้แล้วอะ (貸した300パーツを返してくれる? 使わなきゃいけないから)
- 2TNS41 วันนี้จะเอามาคืนแหละ แต่ATMมันมีปัญหา แล้วแกวันนี้มันไม่มีเลยอะ (今日返すつもりだったけど ATMが故障中だし、この辺には他のATMがないの) 【A.事情説明】
- 3TNS42 อืม : แล้วทำยังไงดีหละ? (う : ん どうしたらいい?)
- 4TNS41 รีบมัยอะ? (急いでる?) 【E.情報要求】
- 5TNS42 มันจำเป็นต้องใช้วันนี้แล้วอะ (今日使わないといけないよ)
- 6TNS41 จั๊นเดียวไปยืมคนอื่นมาให้ก่อนนะ (じゃ 他人に借りてくるね) 【D.代案提示】
- 7TNS42 เอจ ัจนก็ได้ โอเคจ ขอบคุณนะ (うん いいね ありがとうね)
- 8TNS41 ขอโทษจริงจนะ (本当にごめんね) 【B.謝罪表明】
- 9TNS42 ไม่เป็นไร โอเคจ (いいよ 大丈夫)
- } 先行部
- } 中央部
- } 終結部

会話例 1で「→」の記号は分析対象となった発話であり、矢印の右に発話番号を示している。コーディング例としてTNS41は2でATMが故障中で、お金が下ろせないという理由を説明しているため、【A.事情説明】として判断した。コーディングの作業については筆者がJNSとTNS双方のデータをコーディングした後、JNSのデータは日本語教育を専攻する日本語母語話者1名に、TNSのデータは日本語教育を専攻するタイ語母語話者1名に依頼し、再コーディングを行った。コーディングの一致率はJNS84%、TNS91%であった。意見が異なった場合、意見を交換し、お互いに納得するまで話し合った。

## 5. 結果と考察

## 5.1 RQ1 JNSとTNSの謝罪行動の機能においてどのような使用傾向が見られるか

表2 JNSとTNSの謝罪行動の機能の使用頻度

機能	JNS		TNS	
	回数	%	回数	%
A. 事情説明	67	23.10	56	32.37
B. 謝罪表明	<b>77*</b>	26.55	<b>17</b>	9.83
C. 責任承認	12	4.14	5	2.89
D. 代案提示	88	30.34	72	41.62
E. 情報要求	13	4.48	12	6.94
F. 攻撃弱化	0	0	2	1.16
G. 相手への配慮	<b>21*</b>	7.24	<b>3</b>	1.73
H. 互いの親しさに言及	0	0	3	1.73
I. 感謝表明	7	2.41	3	1.73
J. 冗談	5	1.72	0	0
合計	290	100	173	100

 $(p < .05)$ 

表2を見ると、JNSは謝罪行動の機能を290回使用した。10種類の機能の中で【D.代案提示】、【B.謝罪表明】、【A.事情説明】、【G.相手への配慮】、【E.情報要求】、【C.責任承認】、【I.感謝表明】、【J.冗談】の順で8種類の機能が見られた。しかし、【F.攻撃弱化】と【H.互いの親しさに言及】の使用は見られなかった。TNSの謝罪行動の機能はJNSより使用頻度が少なく、173回であった。10種類の機能の中で、【D.代案提示】、【A.事情説明】、【B.謝罪表明】、【E.情報要求】、【C.責任承認】、【G.相手への配慮】、【H.互いの親しさに言及】、【I.感謝表明】、【F.攻撃弱化】の順で9種類の機能が使用された。しかし、【J.冗談】の使用は見られなかった。

## 5.1.1 RQ1.1 JNSとTNSはどのような謝罪行動の機能を多用するか

JNSは8種類の機能の中で【D.代案提示】(88回、30.34%)、【B.謝罪表明】(77回、26.55%)、【A.事情説明】(67回、23.10%)を他の機能より多用していた。以下の会話例2にはJNSの謝罪行動の機能の使用を挙げる。

会話例2 JNS17: 謝罪する側、JNS18: 謝罪される側

- 5JNS17 ちょっとSUICAを1000円チャージしなきゃいけないくて 持って来たのに使っちゃったのね 【A.事情説明】
- 6JNS18 うん
- 7JNS17 今本当に金欠だから 【A.事情説明】  
できればもう一週間待ってほしいんだけど 大丈夫? 【D.代案提示】
- 8JNS18 う:ん ま うんしょうがない:よね
- 9JNS17 ごめんなさい 【B.謝罪表明】
- 10JNS18 うん 本当はサークルの入会費必要だったんだけど (中略) ま 大丈夫
- 13JNS17 (中略) もう今度困ったら貸すから今度5000円ぐらい貸すね 【D.代案提示】
- 14JNS18 それは 大丈夫だけど うん
- 15JNS17 サークルは本当に大丈夫? 【G.相手への配慮】
- 16JNS18 うん ま それは交渉するから いいよ
- 17JNS17 ごめんね 【B.謝罪表明】

JNS17は5で理由を相手に説明している。続いてJNS17は7で金欠の状態を再度説明した後、返済の日を延長したいという提案をしている。JNS18が8で代案提示を受け入れたのに対して、JNS19は9で謝罪を行っている。10でJNS18の説明と許しの発話を聞いた後、JNS17は13で再度提案をしており、15で相手のサークルの支払いについて心配を示している。16でJNS18の解決方法を聞いた後、JNS17は2回目の謝罪を行っている。この結果について、JNSは【A.事情説明】をほとんど使用しない傾向があるという池田(1993)の結果と異なっている。また、JNSは【A.事情説明】を単独で使用せず、説明の前後に【D.代案提示】を併用し、相手との人間関係を修復しようとしていることがうかがえた。つまり、謝罪行動を行う時に、JNSは責任を明確に認め、その上で問題解決のための交渉をする傾向が示された。

一方、TNSが多用する機能は【D.代案提示】(72回、41.62%)と、【A.事情説明】(56回、32.37%)のみであった。以下の会話例3にTNSの2つの機能の使用を挙げる。

- 会話例3 TNS25: 謝罪する側、TNS26: 謝罪される側
- 1TNS26 แก่เงิน300ที่ฉันให้แก้มไปอาทิติยที่แล้วอะ (ねえ 先週貸した300バーツなんだけど)
- 2TNS25 คือเงินเดือนยังไม่ออกเลยอะ เตี่ยเงินเดือนออกแล้วมาคืนได้ปะ? (給料はまだもらってないよ) 【A.事情説明】(給料をもらったら返してもいい?) 【D.代案提示】
- 3TNS26 อินี่วันนี้ฉันต้องเอาเงินไปจ่ายค่าของที่ซื้อไว้อะ ขาดอยู่300อะ (あんた 今日注文した物を払わなきゃいけないから 300バーツが必要よ)
- 4TNS25 งั้นเตี่ยให้แม่โอนให้ได้ปะ? ตอนนี้มีติดตัวแค่ร้อยเดียวเองอะ (じゃ 母に頼んで君の口座に振り込んでもらうから どう?) 【D.代案提示】
- (今100バーツしかないの) 【A.事情説明】
- 5TNS26 เออๆได้ๆ (うんうん いいよ)

TNS25は2で相手に【A.事情説明】を行い、返済の日を延長したいという提案をしている。相手の不満と事情の説明を聞き、TNS25は4で新しい提案をしてから、金欠の状態を再度説明している。その後、TNS26はその代案提示を受け入れ、会話を終了している。つまり、TNSは発話2から4まで【A.事情説明】と【D.代案提示】を繰り返し用い、人間関係を再構築しようとしていた。フォローアップインタビューで、TNSは謝罪表明を行うより、明確に事情を説明し、早めに問題を解決した方が互いの良好な人間関係を維持するのにいいと考えているというコメントが得られた。このように、TNSは【A.事情説明】を使用することで、自分が起こした問題は故意ではないということを相手に伝え、理解してもらうと同時に、自分を守ろうとしていると考えられる。加えて、TNSは【D.代案提示】を多用し問題解決に重点を置いており、Fuangkajonsak (2005) と、ウィッタヤーパンヤーノン (2008) が指摘した「問題解決重視型」を再確認した結果となった。

### 5.1.2 RQ1.2 JNSとTNSの謝罪行動の機能に使用頻度の差が見られるか

両者の間の機能の使用頻度の差を検討するために、t検定を行った。その結果、JNSの方がTNSより有意に多用した機能は、【B.謝罪表明】(JNS: 77回、TNS: 17回) ( $t(48) = 5.43, p < .05$ )、【G.相手への配慮】(JNS: 21回、TNS: 3回) ( $t(48) = 3.03, p < .05$ )であった。

【B.謝罪表明】の使用頻度の違いについてJNSの会話ではこの機能が繰り返し使用されているが、TNSには【B.謝罪表明】を使用しない会話が多かった。この違いは池田(1993)、ウィッタヤーパンヤーノン(2008)、鄭(2011)によると、日本の社会において相手との関係を認識することが重要である。そのため、問題を起こした場合、謝罪する側は謝罪表明を行うことで、相手のフェイスを尊重しながら、友好的な関係を修復しようとしていると指摘されている。一方、TNSにとってこの機能は罪を認めることになり、賠償責任が生じ、自分の名誉を失うことになるとしている(堀江, 1993)。そのため、TNSは謝罪表明をほとんど行わず、会話例3のように【D.代案提示】、【A.事情説明】を中心に使用し、自分自身を守りながら、問題解決を試みていると考えられる。

次に、【G.相手への配慮】の使用頻度の違いについて、鄭(2006)ではJNSの謝罪する側は相手を問わず対人的な配慮や自分が弱い立場であることを示しながら謝罪行動を遂行する傾向があると述べている。すなわち、親しい友人関係でもJNSは自分が引き起こした問題によって相手に迷惑をかけることを懸念する様子を示すことで、弱い立場に立って相手に配慮し、円滑な人間関係を再構築させていると考えられる。一方、TNSの相手へ

の配慮についてFuangkajonsak (2005) では、会話参加者が同等の関係の場合、TNSは相手と同等な立場で、問題解決を試みる傾向があるとしている。本研究の会話参加者も、親しい友人関係であるため、TNSは相手に明確な同情や心配を示す発話の代わりに【D.代案提示】を多く使用していることが観察される。

## 5.2 RQ2 JNSとTNSが多用した謝罪行動の機能においてどのような出現位置が見られるか

本節ではRQ1.1と1.2の結果に基づき、JNSとTNSが多用した【A.事情説明】、【D.代案提示】と、JNSの方がTNSより有意に多用した【B.謝罪表明】、【G.相手への配慮】が会話のどの位置に出現するかを表3に示す。

表3 謝罪行動の機能の出現位置 (回数)

機能	先行部		中央部		終結部	
	JNS	TNS	JNS	TNS	JNS	TNS
A. 事情説明	21	21	40	28	3	7
B. 謝罪表明	9*	0	36*	7	32*	10
D. 代案提示	8	14	57	47	23	11
G. 相手への配慮	0	0	18*	1	3	2

( $p < .05$ )

JNSとTNSの【A.事情説明】は先行部と中央部に多く出現する傾向が見られた。【B.謝罪表明】の出現について、JNSは会話の全ての位置で出現した。特に、中央部と終結部での出現回数はほぼ同様であった(中央部:36回、終結部:32回)。しかし、TNSは先行部にこの機能が全く見られなかったが、終結部で出現する傾向があった(10回)。両者の【D.代案提示】の出現は会話の全ての位置に見られた。特に、出現が最も多い位置は中央部であった(JNS:57回、TNS:47回)。さらに、TNSはJNSより先行部での使用頻度が多かった(TNS:14回、JNS:8回)。そして、【G.相手への配慮】について、JNSの会話は先行部での出現が見られなかったが、中央部と終結部での出現が見られた。特に、中央部での出現が最も多かった(18回)。一方、TNSはこの機能をほとんど使用しないため、先行部に出現が見られず、中央部と終結部の使用頻度も少なかった(中央部:1回、終結部:2回)。

### 5.2.1 RQ2.1 JNSとTNSの間の出現位置に差が見られるか

それぞれの出現位置に差が見られる機能を検討するために、t検定を行った。その結果、先行部に出現の差が見られる機能は【B.謝罪表明】であった( $t(48) = 3.67, p < .05$ )。この結果からJNSはTNSよりこの機能を多く使用する傾向が見られた(JNS:9回、TNS:0回)。また、中央部に出現の差が見られる機能は【B.謝罪表明】( $t(48) = 4.05, p < .05$ ) (JNS:36回、TNS:7回)、【G.相手への配慮】( $t(48) = 2.86, p < .05$ ) (JNS:18回、TNS:1回)であり、JNSの方がTNSより多く使用する傾向があった。また、終結部に出現の差が見られる機能は【B.謝罪表明】( $t(48) = 3.31, p < .05$ )であり、JNSの方がTNSより多用した傾向があった(JNS:32回、TNS:10回)。

JNSの【B.謝罪表明】の出現について、会話例2のように中央部と終結部で出現が見られた。次の会話例4は先行部で出現した【B.謝罪表明】に着目する。

会話例4 (出現位置:先行部) JNS13:謝罪する側、JNS14:謝罪される側

3JNS13 あのう 本当は今日返すはずだったんじゃない?

4JNS14 うん

→ 5JNS13 で本当に申し訳ないんだけど 【B.謝罪表明】

今日 お金ていうか財布を忘れちゃって 【A.事情説明】

JNS13は話題の前触れを行った後、先行部の5で先にJNS14に謝罪を表明し、財布を忘れたという理由を説明している。謝罪する側は【A.事情説明】を行う前に、先行部で謝罪を表明することで、これから謝罪される側の期待に応じえない話が始まるという合図をしていると推察される。以上の会話例を踏まえ、各出現位置で【B.謝罪表明】を行うことはJNSの謝罪する側が起こした問題への反省を相手に伝える働きがあり、人間関係修復の重要な機能として捉えられる。

一方、TNSは先行部で【B.謝罪表明】の出現が全く見られなかった。以下にTNSは【A.事情説明】、【D.代案提示】を使用し、終結部で謝罪表明を行っている会話例を挙げる。

会話例 5 (発話1-2: 先行部、発話 8、11: 中央部、発話12: 終結部)

TNS7: 謝罪する側、TNS8: 謝罪される側

- 1TNS8 เาเงิน300มาป่าว? 300パーツを持って来た?  
 → 2TNS7 เฮ้ย ลืมหนะ วันหลังได้ป่าว? สัญญาๆ (あ 忘れちゃった) 【A.事情説明】  
 (後日返してもいい? 約束する) 【D.代案提示】 (中略)  
 8TNS7 เนี่ยมีอยู่200อะ เาไปก่อนได้ป่าว อีก100นึ่งค่อยให้หนะ (今200パーツあるけど、これを先に返してもいい? 100パーツは後で返すね) 【D.代案提示】 (中略)  
 11TNS8 เออๆแล้วอย่าลืมอีกหนะ (うん 分かった 今度忘れないでね)  
 → 12TNS7 โอเค ขอโทษหนะ (了解 ごめんね) 【B.謝罪表明】

TNS7は2で質問に対して理由を説明し、すぐに問題解決をしている。また、中央部で交渉が続き、8の新しい提案に対して、TNS8は11でそれを受け入れている。その後、TNS7は終結部の12で相手に謝罪を表明している。このように、TNS7は先行部から本題に入ること、相手との問題を早く解決しようとする様子が推察される。また、TNSの謝罪する側は先行部で明確に非を認めることを好まないと考えられ、問題解決に焦点を当て、良好な関係を取り戻せれば、終結部で【B.謝罪表明】を出現する傾向があると言える。

次に、中央部に出現したJNSとTNSの【G.相手への配慮】の違いを述べる。以下の会話例6、7は両者の謝罪される側が自分で問題解決をしている。その発話に対してJNSは【G.相手への配慮】を行っているが、TNSは他の機能を使用し、人間関係を維持しようとしている。

会話例 6 (出現位置: 中央部) JNS29: 謝罪する側、JNS30: 謝罪される側

- 17JNS29 ちょっと他の人に私借りてくるわ 【D.代案提示】  
 18JNS30 あ: :そこまでなくても ま 何とかできる 親に振り込んでもらうとか  
 → 19JNS29 えっ でも今日までなんでしょ 大丈夫? 【G.相手への配慮】

この会話はJNS30が今日学会費を払うため、JNS29に貸したお金を返してもらいたいという内容である。JNS29は17で問題解決をしているが、JNS30はその提案に気遣いを示し、自分で問題を解決している。それに対して、JNS29は19で会費の支払いは今日までということを知っていたため、「大丈夫?」と尋ね、相手に心配を示している。このように、JNSの会話は互いに気遣いを示しながら、問題を解決しようとしていることがうかがえた。

会話例 7 (出現位置: 中央部) TNS37: 謝罪する側、TNS38: 謝罪される側

- 10TNS37 ไม่เป็นไร เดี่ยวไปยืมเพื่อนมาก่อน แล้วมาคืนแก (大丈夫 友達に借りに行っ君に返すね) 【D.代案提示】  
 11TNS38 ไม่เป็นไรจ๋ เดี่ยวชั้นยืมเอกก่อน เดี่ยวของแกค่อยว่ากัน (大丈夫大丈夫 Aちゃんに借りるから 返すのは後でもいいよ)  
 → 12TNS37 เฮ้ย แต่ชั้นเป็นคนยืมแกไป เดี่ยวชั้นไปยืมพี่มา (いや 私が借りた人だから 【C.責任承認】 Pちゃんに借りに行ってくる) 【D.代案提示】

TNS37は10で問題解決をしている。そして、TNS38はその提案に気遣いを示し、自分で問題を解決すると述べ、TNS37に返済の日を延長している。それに対してTNS37はJNSのように相手への心配を示す発話をせずに、12で【C.責任承認】を主張し、【D.代案提示】を再度行っている。

中央部は会話参加者が様々な交渉をしている位置である。JNSの謝罪する側はこの位置で【A.事情説明】、【B.謝罪表明】、【D.代案提示】の他に【G.相手への配慮】を使用していた。つまり、JNSの謝罪する側にとって配慮をことばで表すことで、より円滑な人間関係を維持しようとしていると言えるであろう。一方、TNSの謝罪する側はことばで配慮を示すより中央部で【D.代案提示】、【A.事情説明】を多用し、問題解決を重視することを好んでいると考えられる。

## 6. まとめ

本研究では、ロールプレイ会話をうい機能と出現位置に着目し、日タイ母語場面における謝罪行動の特徴を検討することを目的とした。まず、機能を分析した結果、JNSとTNSの謝罪する側は【A.事情説明】、【D.代案提示】を多用している点が共通している。しかし、JNSはTNSより【B.謝罪表明】、【G.相手への配慮】の使用頻度が多かった。このように、ロールプレイ会話を分析したことで、JNSの機能の使用の特徴は謝罪表明の多用のみならず、事情の説明、相手に配慮を示す機能も使用する傾向があり、先行研究と違う結果が明らかにされた。次に、出現位置の結果について、両者が多用した【A.事情説明】、【D.代案提示】は中央部で多く出現する傾向があったが、先行部での【D.代案提示】の使用頻度はJNSよりTNSの方が多い。つまり、先行部でこの機能を多用したTNSは問題解決に重点を置いていると考えられる。一方、使用頻度が異なる【B.謝罪表明】、【G.相手への配慮】は出現位置にも差が見られた。JNSの会話では【B.謝罪表明】が会話の全ての位置で出現していたが、TNSはこの機能を中央部と終結部のみで使用していたという違いがあった。また、JNSの会話では【G.相手への配慮】が中央部で多く出現していたが、TNSの会話ではこの機能がどの位置にもほとんど出現しない傾向が見られた。ボイクマン・宇佐美(2005)では、謝罪は責任の所在を明らかにするという手順が重要であるとしている。本研究においては、JNSは自ら明確に非を認めるため、【B.謝罪表明】が会話の全ての位置に出現し、加えて【A.事情説明】、【D.代案提示】、【G.相手への配慮】が関係修復過程の核である中央部で多く出現している傾向が見られた。一方、TNSは【B.謝罪表明】のような明確に非を認めることは自分自身を大きく損なう行動であるため、会話の先行部での出現が見られなかった。TNSは先行部から中央部まで、相手に事情を説明し、多様な解決方法を提案し、相手から許しを得た後【B.謝罪表明】が終結部で出現する傾向が見られた。このような違いによって、日本語接触場面でタイ人日本語学習者は日本語母語話者と話す時に、母語の謝罪行動の習慣をそのまま持ち込むと、日本語母語話者にタイ人日本語学習者が問題に対して反省しないという誤解をされる可能性があると考えられる。そのような誤解が生じないように、日タイ母語場面における謝罪行動の相違を学習者に気付かせることが重要であると考えられる。

## 7. 今後の課題

以上、JNSとTNSの謝罪行動の機能と出現位置の特徴を明らかにした。しかし、本研究の対象者の数は各25組のみであり、一般的な結果とは言い難く、データ量を増やす必要がある。また、謝罪場面における関係修復の過程は、謝罪する側と謝罪される側が相互に交渉していくため、謝罪される側の応答にも注目することが重要である。特に、本研究の結果で両母語話者が多用した【A.事情説明】と【D.代案提示】の機能は、謝罪される側の応答にどのように影響するか、つまり、謝罪される側の応答との関係を検証することを今後の課題にしたい。

### 【註】

1. ポライトネス理論は、人が会話をする時に、相手のフェイスを脅かす可能性がある。相手のフェイスへの侵害行為 (Face Threatening Act: FTA) を軽減するために、話し手は相手との人間関係、事柄への被害の度合いを考慮しながら、適切な表現で会話をする。
2. フェイス (Face) は人が持つ基本的な欲求であり、他者に邪魔されたくないという欲求のネガティブ・フェイスと、他者に認められたいという欲求のポジティブ・フェイスがあるとしている (Brown & Levinson, 1987)。
3. 会話例で用いた文字化の記号は、以下の通りである。

h 吸気音、笑い ? 語尾の音が上がる : 音伸び 発話 音の協調  
 = 2つの発話が途切れなく密着している [ 音声の重なり開始 ] 音声の重なりの終了

### 参考文献

Brown, P. & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Fuangkajonsak, W. (2005). *A Comparative study of strategies used in apology by Japanese and Thais*. Thammasat university dissertation. (In Thai)
- 池田理恵子 (1993) 「謝罪の対照研究—日米対照研究—faceという視点からの一考察—」『日本語学』12, 13-21.
- ウィットヤーン・バンヤーン・スニサー (2008) 「日・タイの「謝罪」の発話行為から見た両国の違い」『日本語学論説資料』43, 3, 31-43.
- ウォンサミン・スリーラット (2016) 「不満表明とそれに対する反応に関する研究—日本語母語話者とタイ語母語話者を比較して—」『言語文化と日本語教育』51, 11-20.
- 宇佐美まゆみ (2001) 「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」『談話のポライトネス (第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書)』9-58.
- 熊谷智子 (1993) 「研究対象としての謝罪—いくつかの切口について—」『日本語学』12, 4-12.
- 鄭加禎 (2006) 「謝罪行動における差異—日本語母語話者と中国語母語話者の事例研究—」『アジア社会文化研究会』53-61.
- 鄭賢兪 (2011) 「謝罪行動とその反応に関する日韓対照研究—ポライトネス理論の観点から—」『言語・地域文化研究』17, 95-112.
- ハリスティアニー・ヌリア (2014) 「日本語とインドネシア語の謝罪行動の対照研究」広島大学博士論文
- 堀江・インカピロム・ピリヤー (1993) 「『謝る』—日・タイの謝ることばと行動の比較—」『国立国語研究所報告105研究報告集』14, 403-438.
- ボイクマン 総子・宇佐美洋 (2005) 「友人間での謝罪時に用いられる語用論的方策—日本語母語話者と中国語母語話者の比較—」『語用論研究』7, 31-44.